

バスケットボール男子Bリーグ1部(B1)の強豪、A東京で主将を10季務め、現役を退いた元日本代表の正中岳城(加古川市出身)が神戸新聞のオンライン取材に応じた。前身のトヨタ自動車に入団以来、チーム一筋。背番号7はクラブ初の永久欠番

に決まった。35歳のシューティングガードは「秀でたものがないからこそバランスの取れた選手になりたかった。『ない』ということに向き合い、重ねた努力が武器になった」と穏やかに笑った。
(聞き手・藤村有希子)＝NEXTに詳報＝

B1・A東京主将 正中岳城が現役引退



Bリーグ1部を制し、トロフィーを掲げるA東京の正中岳城(中央)＝2018年5月、横浜アリーナ

「秀でた才能ないから努力重ねた」 加古川出身の35歳

「今の心境は。『(社会人になって)13年間、競技生活を送ることができてありがたかった。先日の引退会見が選手生活の区切りかなと。少しほっとしている」
「引退の理由は。『この立場としてチームでやれることがもうないという事実と、選手として差し出せるものもないということ。チームが新しいステージへチャレンジする一方、自分も次なるステージに進む時期が来たのでは」と

チーム一筋13年、「7」は永久欠番

「『しっかりやれよ』という声掛けが必要なチームではない。アルバルク東京の選手として勝ちにこだわって、競技力向上に一生懸命取り組む。応援したいと思われ存在になる。自分の取り組む姿勢をしっかりと示し、あるべき姿としてそこに居続けることにこだわった」
「長い現役生活で最もうれしかったのは。『最初にトップのリーグ(旧日本リーグ)に立った時。能力、体力が特別あるわけではない自分でも取り組み方を考えてこつこつ進めば、恩師の応援に報いる形となる』
「自身の武器は何と捉えてきたか。
「いろいろな役割、ポジションをこなしてきた。シュートもそこそこだし、ディフェンスもできて、走れて、体もしつかりつくってきた。ただ、秀でたものがないとも言える。だからこそバランスが取れた選手になりたかった。何もなければ、

「B1で2連覇したチームの主将として。『しっかりやれよ』という声掛けが必要なチームではない。アルバルク東京の選手として勝ちにこだわって、競技力向上に一生懸命取り組む。応援したいと思われ存在になる。自分の取り組む姿勢をしっかりと示し、あるべき姿としてそこに居続けることにこだわった」
「長い現役生活で最もうれしかったのは。『最初にトップのリーグ(旧日本リーグ)に立った時。能力、体力が特別あるわけではない自分でも取り組み方を考えてこつこつ進めば、恩師の応援に報いる形となる』
「自身の武器は何と捉えてきたか。
「いろいろな役割、ポジションをこなしてきた。シュートもそこそこだし、ディフェンスもできて、走れて、体もしつかりつくってきた。ただ、秀でたものがないとも言える。だからこそバランスが取れた選手になりたかった。何もなければ、

「『しっかりやれよ』という声掛けが必要なチームではない。アルバルク東京の選手として勝ちにこだわって、競技力向上に一生懸命取り組む。応援したいと思われ存在になる。自分の取り組む姿勢をしっかりと示し、あるべき姿としてそこに居続けることにこだわった」
「長い現役生活で最もうれしかったのは。『最初にトップのリーグ(旧日本リーグ)に立った時。能力、体力が特別あるわけではない自分でも取り組み方を考えてこつこつ進めば、恩師の応援に報いる形となる』
「自身の武器は何と捉えてきたか。
「いろいろな役割、ポジションをこなしてきた。シュートもそこそこだし、ディフェンスもできて、走れて、体もしつかりつくってきた。ただ、秀でたものがないとも言える。だからこそバランスが取れた選手になりたかった。何もなければ、



明石高3年時に全国大会の兵庫県予選男子決勝でプレーする正中岳城。直前の準決勝では1人で72点を稼ぎ、決勝でもチームの優勝に貢献した。2002年9月、神戸高

しょうなか・たけき 1984年9月15日生まれ、加古川市出身。明石市立野々池中一明石高一青学大卒。2007年、旧日本

リーグのトヨタ自動車(現A東京)に入団し、10年から今季まで主将。日本代表としてユニバーシアードやアジア選手権など

で活躍した。B1では18～19年シーズンに2連覇、19年にアジアチャンピオンズ・カップ優勝。180㌢、78㌔。